

中学校家庭科におけるユニバーサルデザイン教育の提案 —生活実態をもとにした教材開発と実践授業報告—

家政教育講座 夫馬 佳代子
家政教育講座所属 土屋 明代

キーワード：ユニバーサルデザイン・高齢者衣服・模擬体験・実技実習・教材開発

1. はじめに

高齢化社会となり、中学校家庭科においても幼児から高齢者、障害をもった方など、さまざまな立場の人々の視点から快適で安全な生活について考えることが求められている。こうした社会の動向は既に家庭科教科書の中にも反映されている。具体的にみていくと、平成20年度の学習指導要領改訂により内容構成で「C 衣生活・住生活と自立」として衣生活と住生活が1つにまとめられ快適な生活への課題追究を行うことが求められているが、住生活の分野では「安全な住まい」として高齢者の視野で歩く模擬体験などが扱われている。一方、衣生活に関しては「ユニバーサルデザイン」の用語が説明されるものの、多様な人々が抱える具体的な衣生活の問題について考える場面設定には取り組まれていない。高齢者の衣生活について考えることは、中学生にとって家族の衣生活が抱える日常的な問題に取り組むことにもなる。

本研究では、中学生が自分の生活の問題解決のみでなく、家族、さらに地域の人々の生活実態にも目を向けることができるよう生活実態を見つめ、実感が伴う授業実践の在り方を模索しながら、中学校家庭科におけるユニバーサルデザイン教育の可能性について検討した。

2. 題材「高齢者の生活実態に基づいた衣服の改良」設定の背景

現在核家族化が進み、中学生にとっても自分以外の家族の衣生活の実態、家族が抱える衣生活の問題点に気づく機会は少ないと思われる。特に高齢者の方と同居をしていない場合は、それぞれの立場で快適な衣生活に求められる要素が異なることに気づきにくい。

そこで、本題材では、高齢者の方の生活実態を捉え、高齢者の方が抱える衣生活の課題、特に生活の様々な場面から生じる問題に着目し、生徒が実感を伴い衣生活の問題解決に取り組めるよう、生活実態の調査と高齢者の方の要望・願いを具体的に伝えるための教材開発に取り組んだ。

特に本題材では、今まで着用していた既製の「少し改良すれば着易くなる」という視点で取り組み、今後の家族の日常生活の中で、家庭科で学んだ基礎技術を生かして祖父・祖母のボタンなどの留め具を使い易く付替える等、学んだ知識・技術で周りの人々の生活も快適に創造することが可能であるという、生活を創り出す自信に発展させることができることをねらいとした。

3. 高齢者の生活実態にもとづく教材開発

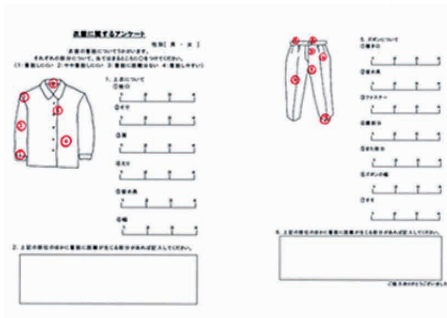
教材開発には、以下の4つの段階を設けた。具体的には、①生活実態の観察、②生活の中の課題を捉える、③問題解決の方法を提案、④教材の作成の4段階である。この4つの段階により、高齢者の抱える衣生活の問題をより現実と感じ、中学生が自分の問題として問題解決に取り組める支援となるよう留意した。

各段階の取り組み内容について、次に述べていきたい。

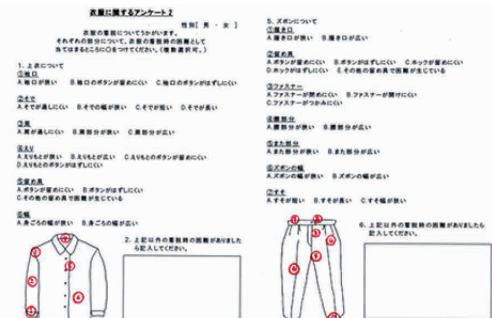
(1) 高齢者の生活場面の観察・交流

高齢者の着装上の困難な点を明らかにするため、高齢者施設における観察・調査に取り組んだ。具体的な手順としては、①聞き取り調査に使用するアンケートを作成（資料1・資料2参照）。②高齢者施設を訪問し、高齢者一人一人と会話をしながら衣服についての聞き取り調査を行う。③この調査から得た高齢者の意見・要望をもとに衣生活において早急に解決する課題を絞り込む。本研究では着装上の課題の中で特に「衣服の着脱時に抱える問題」に重点を置き、問題解決に取り組むこととする。

資料1. 高齢者の衣生活の課題



資料2. 高齢者の衣生活の課題2



(2) 各高齢者の体調と抱える衣生活の課題

上記の聞き取り調査の結果から、高齢者が抱える衣生活の問題として「着脱の際に留め具で困難が生じている」という意見が多くみられた。特に既製服に使用されているボタンは、高齢者にとっては【小さく扱いにくい留め具】であることが明らかとなった。上衣に対する要望として「かぶって着るタイプの上衣が良い」という意見が多くあり、留め具が留められない場合の対応策として考えられた着装法が「ボタンをかけたままかぶって着る」という行為であると考えられる。

また一方で、外出時にも着られる「デザインの良い衣服が欲しい」という要望もあり、着脱のし易さの機能面だけでなく、見た目もデザインの良い「お洒落なもの」が求められている傾向もみられた。

この聞き取り調査の結果をもとに、高齢者の着脱の困難を解決するための改良服の開発を行こととした。高齢者衣服の開発のポイントは、各人の要望にもとづき以下の3点とした（資料3・資料4参照）。

資料3. 高齢者の衣生活改良への要望

高齢者の状態	現状（上記）	現状（下記）	要望（上記）	要望（下記）	その他
A おさん	・着脱に難いがある。 ・袖口が狭い。 ・足首もが広いと 難い。 ・ボタンが小さいと 難い。	・スカートは難い。	・袖口にゴムを入れ る。 ・ボタンを大きくした い。		・着る。 ・履みがある方の足は ズボンが狭きにくい ので着たいから 履いてほしいと 言っている。 ・履いたままズボンを 履く。
B おさん	・袖口の手前、袖口が 広い。 ・裾から履き替わって いる。 ・片手だと前開きの 服は着ることがで きない。	・スカートは履きか ら。 ・裾に履き替わりの が難い。 ・片手だと前開きの 服は着ることがで きない。	・足首もが広いが いい。 ・かぶり物で足首も たのみボタンで家 のシャツが履き やすい。	・裾部分中央部分 開けた方がい い。 ・足首のみで履き 替わりたい。 ・ズボンの足首が 広いと履き替わ りに難い。	・かぶって着るタイ プの服を着たい。 ・足首のみで履き 替わりたい。 ・ズボンの足首が 広いと履き替わ りに難い。
C おさん	・フックは開けられ ない。 ・フックは開けられ ない。	・フックは開けられ ない。 ・フックは開けられ ない。	・ボタンの付いた 服が着やすい。 ・大きめのボタンが いい。 ・マジックテープが いい。		
D おさん	・履き替わって自分で 歩くことができる。	・ジャージは履き やすい。 ・履き替わって自分で 歩くことができる。	・履き替わって自分で 歩くことができる。 ・履き替わって自分で 歩くことができる。		・履き ・履き替わって自分で 歩くことができる。 ・履き替わって自分で 歩くことができる。

資料4. 高齢者の衣生活改良の要望

おさん	・小さいボタンの服 は自分で履き 替われない。 ・履き替われない。 ・ズボンが狭い。				・履き ・履き替われない。 ・ズボンが狭い。
おさん	・履き替われない。 ・履き替われない。	・履き替われない。 ・履き替われない。 ・履き替われない。 ・履き替われない。	・履き替われない。 ・履き替われない。 ・履き替われない。 ・履き替われない。		・履き ・履き替われない。 ・履き替われない。 ・履き替われない。 ・履き替われない。
おさん	・履き替われない。 ・履き替われない。 ・履き替われない。 ・履き替われない。	・履き替われない。 ・履き替われない。 ・履き替われない。 ・履き替われない。	・履き替われない。 ・履き替われない。 ・履き替われない。 ・履き替われない。		・履き ・履き替われない。 ・履き替われない。 ・履き替われない。 ・履き替われない。
おさん	・履き替われない。 ・履き替われない。 ・履き替われない。 ・履き替われない。	・履き替われない。 ・履き替われない。 ・履き替われない。 ・履き替われない。	・履き替われない。 ・履き替われない。 ・履き替われない。 ・履き替われない。		・履き ・履き替われない。 ・履き替われない。 ・履き替われない。 ・履き替われない。

- ① かぶって着ることのできる上衣。
- ② 小さなボタンに代わる高齢者でも扱いやすい留め具を使用する。
- ③ 外出時にも着られるデザインの良い衣服。

なお、本研究では上記で述べたように、各高齢者の体の状態に応じて、既製の不都合な箇所をリフォームし、高齢者の要望に適した衣服に改良することを目的にとりくんである。

(3) 既製服からの改良（リフォーム）の提案

本題材において、既製服からのリフォームを提案した背景には、小学校・中学校段階の家庭科において、環境について学ぶ上で3R・4R・5Rに関する知識に関して学ぶものの、実践する場面は乏しい現状がある。不要となった衣類を用いて、新たな作品を創り出す試みは多くみられるが、リフォームすることに目的、必然性が無ければ、製作作品も不要の作品として活用されない現実があるのではないかと危惧する。そこで、明確な目的を持ち、日常生活においても、既製の不都合な点をリフォームすることにより、「着脱が楽になる」など、生活を変えることが可能であることを実感として学ばせることをねらいとした。

具体的には、①高齢者の一人一人の体の状態に合わせて、既製服を改良することにより、衣生活を変えることが可能であることを体験する。②中学生の環境問題と関連してリフォームを実践的に学ぶ。③小・中学校段階で学んだ基礎技術が実際に生かせる場面を体験。④中学生の自分は既製服を着用できることが当然であると考え、既製服を着用できない人々もいることを認識する。⑤ユニバーサルデザインに考える契機とする。以上の5点が、既製服を土台としたリフォームに取り組むねらいである。

(4) 高齢者の要望をもとにした衣服改良の提案と製作 【 標本の製作 】

高齢者の要望をどのように「形」にするのか、教師が標本製作として実践的に取り組むことにより、生徒が具体的に衣服を改良することへのイメージがつかみやすいように留意した。

以下に示す衣服改良の製作は、全て授業中に教師の取り組みとして紹介するとともに、標本として活用するものである。

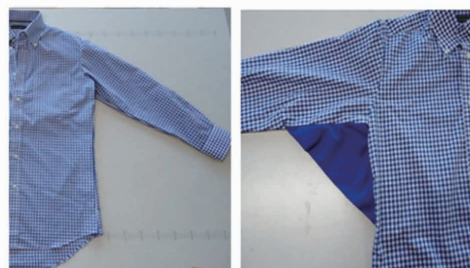
① マチ入りのシャツ—腕が上に動かしづらい事例への対応—

資料5. 既製服を高齢者の要望をもとに改良



資料5-1 製作手順

脇を開き、腕が通し易いようにマチを入れる



資料5-2 製作手順

袖口のボタンを面テープに換える



資料5-3 製作手順

留め具を面ファスナーに換え飾りボタン



この高齢者衣服は前のボタンを使わずに、頭からかぶって着ることができる衣服となるように製作した。4つの改良のポイントを以下に示す。

資料 5-5 製作手順
既製服を改良した腕が上がらない方のシャツ



資料 5-4 製作手順
留め具を面ファスナーに換え飾りボタン



○脇部分が広がっている

衣服に関する聞き取り調査において、かぶって着るタイプの衣服が好ましいという意見があり、かぶって着ることができる工夫として脇部分を広くした。脇部分を切り開き布を付けたすことによって、脇部分が広くなり、容易にかぶって着ても、容易に腕が通るのではないかと考えた。また、脇部分に布を付けることにより、既製のシャツを着る時よりも肩を上げる動作を少なくして着脱ができると考えた。

○袖口が面ファスナーで開閉できる

調査により、袖口のボタンが小さくて留めにくいという意見を得たので、ボタンと使わずに袖口が開閉できるように袖口に面ファスナーを付けた。面ファスナーであれば容易に接着や剥離ができると考えた。面ファスナーのフック状のものとループ状のもの両方を同じ幅のまま縫い付けると面ファスナーが強く接着され、開閉が容易でなくなってしまうので、片方の面ファスナーの幅を半分の長さにして縫い付けた。

○裾が面ファスナーで開閉できる

衣服をかぶって着るということを考えると、身ごろ部分が狭く、長いものは好ましくないと考えた。そのため、すそを10cm 切り開いた。すそ部分の接着には面ファスナーを用いた。

○えりもとが面ファスナーで開閉できる

調査により、えりもとのボタンが留めにくいという意見を得たので、えりもとに面ファスナーを縫い付け、ボタンを使わずに開閉できるようにした。ボタンは飾りボタンとして付けておき、デザイン性も重視した。

② 肩は開閉可能なブラウス

—手指が動かし辛くボタンをはずさず頭から被る装着事例への対応—

資料 6-1 製作手順
肩を開いて被れる工夫をする

資料 6-2 製作手順
肩を開いて被れる工夫をする

①既製服の改良前の状態



②肩を開いて頭が通り易くする



③前面が大きく開く構成



④外観は通常の衣服形態



この高齢者衣料は容易に頭からかぶって着ることができる衣服を目指して製作した。改良のポイントを以下に示す。

- 肩部分が面ファスナーで開閉できる。
- 肩部分が開くので頭を容易に通すことができると考えた。面ファスナーのフック状のものとループ状のもの両方を同じ幅のまま縫い付けると面ファスナーが強く接着され、開閉が容易でなくなってしまうので、片方の面ファスナーの幅を半分の長さにして縫い付けた。

③ ボタンを簡易にしたブラウスボタンをはずさず頭から被る着装事例への対応—

女性用上衣Ⅱの改良のポイントを説明する。高齢者の方への衣服に関する聞き取り調査により、見た目がお洒落な衣服が好ましいという意見を得たので、この高齢者衣料は着脱がしやすく、さらにお洒落に見えるということを重視して製作した。改良のポイントを以下に示す。

- えりもとが面ファスナーで開閉できる。
- 頭からかぶって容易に着脱ができるように襟元を開閉できるようにした。
- 接着には面ファスナーを用いた。前述したように面ファスナーの一方は幅を半分にしている。見た目が変わらないように、元々付いていたボタンは飾りボタンとして縫い付けた。
- 袖口が面ファスナーで開閉できる。調査により、袖口のボタンが小さくて留めにくいという意見を得たので、ボタンと使わずに袖口が開閉できるように袖口に面ファスナーを付けた。えりもとと同様、見た目が変わらないように、元々付いていたボタンは飾りボタンとして縫い付けた。

④ 裾部分の開閉可能なズボンズボンへの足が通し辛い・靴が履き辛い事例への対応—

資料 7-1 製作手順
ボタンをかけずに被れる工夫をする



資料 8-1 製作手順
ズボンの裾を開き穿き易く工夫する

①既製のズボンの裾を開く ②裾両側に面テープで開閉



資料 8-2 製作手順
ズボンの裾を開き穿き易く工夫する

③力を入れず着脱可能にするためテープ幅を狭くする ④着装の外観は既製服と同様



高齢者の方への衣服の聞き取り調査において、車いすを使用している高齢者の方から「ズボンを着脱する時に靴を脱いだり履いたりするのが大変だから、靴を脱がなくても良いようにズボンの膝から下の部分が開くようになっているズボンがほしい。」という意見を得て、開発した高齢者衣料である。改良のポイントを以下に示す。

- 膝から下が面ファスナーで開閉できる。
- 靴を履いたままズボンが着脱できるよう、膝から下を切り開き、面ファスナーで開閉できるようにした。こうすることで、靴を履いたままズボンが着脱できるだけでなく、ズボンに足を通す動作も容易になるのではないかと考えた。

(5) 改良衣服に対する着装後の意見

資料9-1. 改良衣服を着装し着心地を確認

①襟を留める動作



②袖口を留める動作



資料9-2. 改良衣服を着装し動作を確認

①着易く腕が動きやすいか



②ズボンが穿き易く、靴も履き易くなるか



男性用シャツと男性用ズボンの着装評価を行った。高齢者衣料を着用した感想は以下の通りである。
○男性用シャツー「袖が通しやすい」「袖口も閉めることができて楽」「えりのあきが狭いので自分では脱ぎにくい。大きく開いていた方が楽」。

○男性用ズボンー「ズボンのすその開きは履きやすい」「すその開きは留める時にかがむので大変」「ウエストの留めは楽にできる」「脱ぐ時は引っ張る部分がほしい」。

男性用シャツは脇部分に布を付けたしたことにより袖が通し易くなった。袖口も留め具を面ファスナーにしたことにより楽に閉めることができるようになった。襟の開きはより広くする必要があると考える。

男性用ズボンは裾を開くことで履きやすくなったが、裾を留める時にかがむのが大変であるという新たな困難が生じた。

4. 授業構想の特色

本授業の構想の特色は以下に示す4つの特徴がある。具体的な内容について各項目で述べる。

(1) 高齢者の生活実態と衣生活の課題を実感を伴い伝える（生活観察と意見）

資料10-1. 高齢者の衣生活の実態と課題と要望「声」を伝える

ABB(女性)

- ・身体は特に不自由なところはない。
- ・上衣はボタンで前を開く衣服よりも**かぶって着ることのできる衣服が良い。**
- ・簡単にかぶって着ることができ、脱ぐことも簡単にできる衣服が欲しい。

BBB(女性)

- ・片方の足に痛みがあるためズボンが履きにくい。
- ・普段はまず痛みのある方の足から通して何とか履いている。
- ・ズボンは立って履くことが出来ないため、座って履いている。
- ・**座ったまま着脱できるズボンがほしい。**

資料10-2. 高齢者の衣生活の実態と課題と要望「声」を伝える

CCB(女性)

- ・右腕マヒのため右腕を動かすことが出来ない。
- ・片手では前開きの上衣は着ることが出来ないため、かぶるタイプの衣服を着用している。
- ・上衣のそでを通すのが大変。
- ・**片手でも着脱しやすい衣服が欲しい。**

DDA(男性)

- ・片手が不自由。
- ・そでや、**そでが大きく開いていると風が入ってきて寒い。**
- ・**ゆったりした衣服が欲しい。**
- ・**ボタンは留め外しがしやすいように大きなものが良い。**

本授業では高齢者の生活実態（生活観察）と衣生活の課題（意見・要望から）を生徒に実感を伴い伝えることを目的に教材開発に取り組んだ。こうした考えを学習プリントに反映し、資料10-1・10-2に示すように高齢者一人一人の現在の体が抱える現状と衣生活で抱える問題や願いを明確に示し、資料10-3で示すような学習プリントを作成した。

授業において、この学習プリントを高齢者のインタビュー記事として教師が紹介し、個々の具体的な実生活の問題に取り組むという意識を育てる。

(2) 高齢者が抱える衣生活の問題を実感を伴って考える（体験）

高齢者の着脱における困難さを時間を伴い検討するために擬以体験を導入する。住生活では高齢者の視点で学校内を歩き、危険な箇所に気づくなどの模擬体験を生かした学習活動が積極的に導入されているが、衣生活における擬以体験の導入は少ない。

本教材では、軍手を両手にはめ、手指が自由に動かせない状態で、どの程度、既製服の着脱が可能であるかを体験する。手指を自由に使えることが当然であり、衣服の着脱を問題として認識したことが無い中学生が、手指の感覚が少し鈍るだけであっても日常の衣生活に多大な影響を与えることを実感を伴い学ぶことを意図している。

(3) 教師の取り組む姿勢（教師が考案した衣服改良）

教師が介護施設を訪問し、実際に高齢者と交流する姿勢を授業の中で紹介することにより、教師も教える立場のみでなく、生徒と同様に学び、チャレンジする姿勢で授業にのぞんでいることを強調したい。

家庭科における生活の創造は、実生活を観察し、実際の問題点に気づき、その問題を当事者とともに解決することであり、それが家庭科の根幹であることを、本教材を通して気づかせることを意図している。

教師の衣服改良への取り組みを、標本「改良服」として提示することにより、生徒の興味・関心を育てることも意図している。但し「標本」の存在が生徒の自由な発想に与える影響についても、後で検討を加える。

(4) 生徒の自由な発想を育てる（創造・創作）

生徒の学習活動としては、生徒各自が高齢者の衣生活の実態や要望を知り、さらに模擬体験を通して高齢者の衣服着脱の困難さを実感した上で、各自が自分の発案でそれぞれの高齢者のための衣服の改良案を考案する。この段階では、まず自分の発想を形に転換できるよう、図で簡略に示せるように留意する。

表現方法の優劣にとらわれず自分の考えを表現できるよう、言葉で説明を加えることを助言する。

(5) 生活実態をふまえた問題解決学習への取り組み（問題解決）

各自の発案をもとに、グループで検討を行う。高齢者の個々の体の状態や願いをもとに、どのように解決することが可能であるか、交流を繰り返す。この場合の留意点は、漠然と考えるのではなく、実際の高齢者の願いをどのように形にするか、既製服のどの部分を改良すると、要望に対応することができるのか。自分の技術で可能であるか、着用するとどのような状態になるか等、より具体的に確認しながら検討を重ねる。

各グループにおいて小黒板を活用することにより、意見交換の中で、徐々に変更を重ね、発案と検討を繰り返す活動が可能となる。

考えが決まったグループから発表し、クラス全体に問題提起をする。

5. 授業構成・指導案

(1) 授業実践のねらい

本実践授業は、現在高齢化社会となっている日本において、様々な視点から高齢者環境について知る必要があるが、中学校家庭の被服分野では高齢者の衣生活環境に関する教材がないという問題を解決する提案の適宜性を検討するものである。

第1回	平成25年11月12日 1時間目	A中学校	1年1組
第2回	平成25年11月12日 2時間目	A中学校	1年2組
第3回	平成25年11月13日 2時間目	B中学校	2年1組
第4回	平成25年11月13日 4時間目	B中学校	2年2組
第5回	平成25年11月18日 2時間目	B中学校	2年3組
第6回	平成25年11月18日 3時間目	B中学校	2年4組

本授業実践では、高齢者にとって着やすい衣服を考え、高齢者環境に目を向けると同時にユニバーサルファッションについての意識を高めることができると考える。また、普段は目を向けることの少ない高齢者の衣生活環境について考えることを通して、高齢者だけでなく世代等さまざまな違いをこえて、互いを尊重し、支え合う関係やそれぞれの人びとのライフスタイルを尊重し、互いに支え合う社会であるノーマライゼーション社会への関心へとつなげることができると考える。

なお、授業は以下に示すように各校合わせて全6回の授業実践を行った。

(2) 授業構想の概要

本時は、「高齢者は衣服の着脱時に困難を抱えていることに気づき、高齢者衣料を見ることや高齢者の意見を知ることから、その困難を解決する工夫を考える。高齢者や体に不自由のある方でも少しの工夫を施すことで自分の着たい衣服を切ることが出来ることに気付く」ことをねらいとする。

まず、授業の構想を考えた。導入では、自分たちが普段どのように衣服を選んでいるのかを振り返る。この問いかけでは、「色やデザインで選ぶ。」「サイズの合う服を選ぶ。」などの意見が出ると考える。そこで、次は高齢者の視点に立って考えるよう促す。高齢者は中学生の皆さんのように自由に衣服を選べるだろうか。ここでは、「できない。」「わからない。」などの意見が出ると考える。そこで、年を重ねると手先に力が入りにくくなる、指が思ったように動かないなどの身体に不自由が生じ、衣服の着脱に影響が出ると話す。しかし、話を聞いただけでは身体に不自由が生じるというイメージを持つのは難しい。そこで、高齢者の疑似体験を行う。軍手を二重にして手にはめ、その手で小さなボタンを留めることで高齢者が抱えている手先が動かしにくいという間隔をつかむ体験をする。実際にこのような体験をすることで、高齢者が衣服の着脱に困難を抱えていることを理解する。そして、その困難のために自分たちのように自由に衣服を選ぶことが難しいということを知る。そして、この困難を解決するためにはどうしたら良いかという課題を投げかけ、展開へ移る。

展開では、まず衣服の着脱時の困難について高齢者の意見を知る。第2章の聞き取り調査から得た高齢者の意見をもとに作成した衣服についての高齢者の意見を紹介する。次に、高齢者の意見をもとに改良した高齢者衣料を見て、高齢者衣料のイメージをつかむ。そして、高齢者の衣服の着装時の困難を解決する衣服の改良案を考える。まずは、一人一人考え、学習プリントに記入する。次に、グループ内で改良案を交流する。次に、グループでまとめた改良案をもとにグループで一着オリジナルの改良服を考える。そして、グループごとに発表をする。最後にまとめとして感想を記入するという流れとなっている。

資料11. 指導案
技術・家庭科（家庭分野）学習指導案

(3) 指導案

授業概要で述べた考えをもとに指導案を作成した。作成した指導案を資料11に示す。

授業の流れは指導案に示し、具体的な授業内容については、授業分析の項で触れるので、授業紹介は省く。

導入部分では、既製服が着用でき、自由に衣服が選択できる自分の衣生活と高齢者の衣生活の問題に気づかせる。高齢者の手指の模擬体験への興味・関心に結びつき、発展するように留意する。

本時のねらい

高齢者は衣服の着脱時に困難を抱えていることに気づき、高齢者衣料を見ることや高齢者の意見を知ることから、その困難を解決する工夫を考える。高齢者の方や体に不自由がある方でも少しの工夫を施すことで自分の着たい衣服を着ることが出来ることに気付く。

本時の展開

過程	学習活動	指導・援助
導入	<p>①普段どのように衣服を選んでいるのかを振り返る。高齢者の方は皆さんのように自由に衣服の選択が出来るだろうか。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・小さいボタンは扱えるのだろうか。 <p>②実際にボタンを留める体験をする。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・小さいボタンは留めにくい。 <p>高齢者の方の衣服の着脱時の困難を解決するにはどうしたらよいだろうか。</p>	<p>①皆さんはどんな視点で衣服を選んでいきますか。高齢者の方は自由に衣服の選択が出来るのだろうか。</p> <p>※小さいボタン付きシャツの提示。高齢者の方は小さなボタンのシャツを困難なく着ることが出来るだろうか。</p>
展開	<p>③衣服の着脱時における困難について、高齢者の方の意見を知る。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・片手が不自由だと衣服の着脱は大変そうだ。 ・高齢者の方は衣服の着脱時にこんなにも困難があるなんて知らなかった。 <p>④高齢者の方の意見をもとに改良した衣服を見る。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ボタンではなくマジックテープで留めるようになっている。 ・脇が広いと着脱がしやすいのだな。 <p>⑤高齢者の方の衣服の着脱時の困難を解決する衣服の改良案を考える。一人一人考え、学習プリントに記入する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・袖口にゴムを付けよう。 ・マジックテープで開け閉めできるようにしよう。 <p>⑥グループ内で改良案を交流する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・あの改良案は私の意見と似ているな。 ・この改良案は思いつかなかった。 <p>⑦グループでまとめた改良案をもとにグループで一着オリジナルの改良服を考える。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・これらの改良案をまとめるとこうなるよ。 ・留め具はどちらの意見が良いだろうか。 <p>⑧グループごとに発表する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・あの改良点が素敵だな。 ・とても着脱がしやすい工夫だな。 <p>⑨感想を記入する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・高齢者の方は衣服の着脱時に様々な困難を抱えていることが分かった。 ・少しの工夫でも着脱がしやすくなることがわかった。 	<p>②※各班に軍手とシャツを配布。体験することで着脱時の困難のイメージをつかみやすくする。</p> <p>③※学習プリントの配布。</p> <p>様々な高齢者の方の着脱時の困難な点を紹介する。また、高齢者の方の衣服についての要望も紹介する。</p> <p>高齢者の方の意見などは黒板と学習プリントに提示し、常に確認できるようにする。</p> <p>④※実物資料と写真の提示</p> <p>それぞれの衣服について、高齢者の方からの要望とその要望を受けての改良点を説明する。</p> <p>⑤学習プリントの記入例を提示する。考えが浮かばない生徒には高齢者の方の衣服についての要望をもとに工夫を考えるよう促す。</p> <p>⑦※各班にホワイトボードとペンを配布。</p> <p>⑧発表をする班と発表を聞く班の組み合わせを指定する。</p> <p>《評価規準》</p> <ul style="list-style-type: none"> ・高齢者の着脱時の困難を解決する工夫を考える。 <p>【創意工夫】</p>
まとめ		

6. 生徒の学習活動

(1) 生活観察や高齢者のインタビューの教育的効果

高齢者の「願い」をまとめた学習プリント（資料10-3）は、ポイントになると考える内容に線を引くなど、他者の立場に立って生活の改善に取り組む姿勢がみられた。

考案事例（資料13・14）の説明に記載されるように、「袖口から風が入らぬように」「ズボンは穿き易いように」「ボタンがはずし易いように」など、高齢者の「願い」を具体的に取り上げ、その「願い」に対応して既製服に改良を加える姿勢がみられた。

(2) 体験の教育的効果



資料12. 実践授業 体験

S: (軍手を使った高齢者体験を行う。)
S:「とれた！」
S:「つけれん！」
S:「無理ー！」
T:「終わったら軍手取ってまた中に入れておいてください。」
T:「今、軍手をはめて高齢者の方と同じような手先を動かすことの難しさを体験してみて、簡単にボタンをつけるのも外すのもできていう人いますか？」
S:「とるのは簡単。」
T:「とるのは簡単。はめるのできた人はいますか？」
S:「できない。」
T:「これは難しそうだな、小さいボタン難しいなと感じることができましたか？」
S:「はい。」「はい！」「はい！」
T:「今、みんなに体験してもらったように小さいボタンが留めにくかったりとか他にも色んな体の不自由が高齢者の方には出てくるので、その不自由なことによってさっき言ったみたいに衣服を選ぶ幅が狭まってしまう。今日は、この課題書いてあるんだけどそういった困難をどうやって解決するかっていうことをみんなで考えていこうと思います。」



写真1. 擬以体験 両手に軍手をはめボタンの開け閉めを行う体験

高齢者の衣服の着脱行動の困難さを、実感を伴い捉えることができるよう、両手に軍手をはめ既製服のシャツボタンをはずす・はめる行為を体験として取り入れた（写真1参照）。その結果、資料12に示すように、各グループで軍手をはめた状態での着脱に挑戦するする姿がみられたが、「手指が少し使いづらいだけでも衣服を着用することは困難になる」「毎日衣服を着るときに大変な思いをする」など、実感として着用の困難さを捉える言葉が交わされた。こうした生徒の授業での取り組みを観察するかぎり、擬以体験は一定の教育効果をあげることができると推察する。

体験の具体的な教育的効果については、今後さらに、アンケートをもとに分析する必要がある。

(3) 標本の教育的効果（教師の衣服改良への取り組みと作品の提示）

教師が授業内のどのタイミングで標本を提示するかは、実技実習に関する授業では生徒の学びに多大な影響を与えると考えられる。一般的には、製作課題に取り組む前に、製作物の具体的なイメージや意欲を育てるために実物標本、さらに具体的な製作の見通しを立てるために段階標本を提示することがある。また実習での技術面の理解を支援するために、拡大標本や部分標本を実習に取り組んでいる段階で提示する場合もあると思われる。

本授業では、教師が既製服の改良に取り組む姿勢を生徒に示し製作への意欲を育て、さらに教師が考案した改良衣服を標本として活用することにより、ともに新たなものを創造する姿勢を示すことをねらいとした。そのため、A校の第1回目の授業の流れでは、最初に高齢者の衣服の着脱の困難さを模擬体験をもとに考え、高齢者の「願い」を知った上で、教師が取り組んだ既製服の改良を標本として5作品示し、各作品標本の解説をした。この結果、生徒の考案した改良衣服には、標本として提示した作品の改良案と同様の発想での問題解決方法が多く示された。教師の示す標本が、生徒の発想に多大な影響を与え固定してしまったことは明らかであった。そこで授業における標本の提示方法について再検討し、資料11の指導案に示したように、標本を教室側面に展示しておき、各自で考案する活動、グループで考案する活動場面において、参考にする支援教材として、標本の位置づけを変更した。生徒には、「既製服の改良の5つの事例も展示してあるから

参考に見たい人は見に来て」と、各自が自主的に参考にする標本として位置づけた。

その結果、多くの生徒が各自で必要とした場面で、支援教材として参考にする姿が見られた。このような標本の位置づけとしたが、生徒が考案した改良案（資料13参照）をみると、面テープを用いた留め方、ズボンの下部を開き穿き易くするなど、多くの視点で標本の影響は見られる。

実習実技授業における標本の提示方法は、引き続き今後の課題としたい。

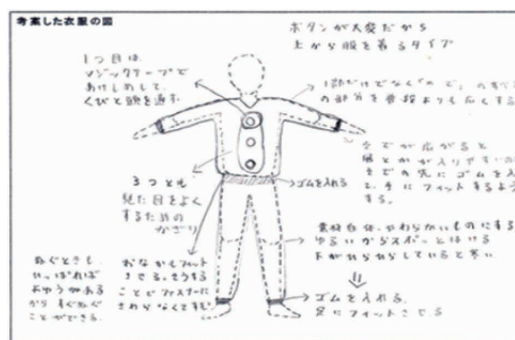
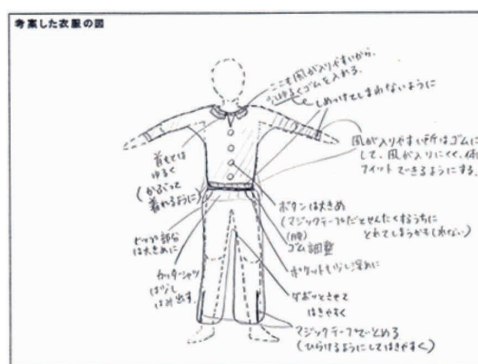
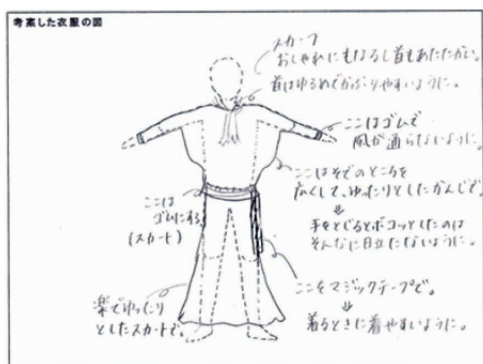
(4) 問題解決学習への取り組み

生徒の高齢者の願いをもとに既製服を改良するという家庭科における問題解決学習の活動の様子を資料13に示す。ここでは高齢者の生活実態と衣生活で抱える問題点、さらに「願い」を土台に課題解決に取り組みながらも、自分に今までの生活経験も含めて発想する様子が見られる。

生徒の発想で多く用いられるキーワードは「着易く」「寒くない」「楽に」「デザイン」などがあり、特にデザイン面で外出時でもおしゃれに着れることに意識が高い傾向が見られる。改良服で用いる留め具は「ファスナー」「大きなボタン」「面テープ」「ゴム」などが多く見られる。

資料13-1. 衣服の考案事例①

S:「冬服なんですけど、上のポンチョとズボンはくっついて、ここでファスナーとか付けていたら取れるようになってるんですけど、ワンピースみたいに一気に着れるようにするということ。ここでここにファスナー付けてえりを大きくすることによってワンピースみたいに一気に着れるっていう上から着るってことで、袖が風が通って寒いってことで、ゴム付けて、言うの忘れてたんですけど上のえりを大きくすることによってここが(えり部分)寒いってことでマフラーでそれをカバーってことで片手でも付けれるのでマフラーは、そういうことでつけたしました。この丸いやつはボタンなんですけど、ボタンはデザインってことで外出時でもそういうデザインを考えてボタンをつけることによってデザインをカバーってことで、くっ付けない場合でズボンは脱ぐが大変ってことなので下の方に、スポーツやってる人は分かるんですけど、ジャージとかの下にファスナーとか付けてるんでそれでちょっと広げて脱げるようにするっていうのがあって、下のズボンの下のところもホック付けてそういうことでカバーとしました。個々の部分なんですけど、(肩部分を指して)肩が上がらないってことでちょっと広くしたいってことでゆったりするってことを意識してここをこうしました。ズボンのここも入れにくいってところがあるかもしれないのでちょっと広めに作るってことでしました。これで終わりです。」



資料13 2-5 (上段：左資料13-2・右資料13-3 下段：左資料13-4・右資料13-5)

7. 家庭科の生活課題に実感を伴い「問題解決学習」をするには

一 地域や施設との連携一

本授業では、高齢者施設における教師の観察及び改良服の考案という実体験をもとに生活課題を実感を伴い受け留めることができる教材開発に取り組んだ。その結果、課題は多くあるものの、一定の成果は得られたと考える。ここでは最後に、今後こうした生活課題に対する問題解決学習にどのように取り組む可能性があるのかについて考えていきたい。具体的には、高齢者など他者の立場に立ち、生活課題に実感を持ち「問題解決学習」に取り組むにはどのような学習環境が必要であるか、

よく用いられる方法は、ゲストティーチャーとして地域の方々の協力を得て来校していただき、直接話を伺う授業である。しかし、本授業で題材としたような体に困難な課題を持つ高齢者の方々が、授業の為に来校できるかは疑問である。むしろ、生活を課題とする家庭科であるからこそ、実際の問題を抱える生活実態に直接接し、観察した上で問題解決に取り組むことが理想であろう。保育領域では、幼児の生活実態を理解するために保育園や幼稚園に実習訪問する課題にも取り組まれている。こうした取り組みを実現するには、各施設との連携が必要となっている。こうした領域と同様に、高齢者の問題を実感を伴い学ぶためには、地域の介護施設等と連携を持ち、生徒が直接、高齢者の「願い」を受け留めることができる教育環境を作り出すことが必要であろう。

家庭科では、授業において教材開発に取り組むとともに、家庭科ならではの実生活から学べる「社会の中での教育の場」を設けることも今後の課題と考える。

8. 今後の中学校家庭科におけるユニバーサルデザイン教育について

中学校家庭科の教科書において「ユニバーサルデザイン」の用語は掲載されるが、現在の段階では積極的に授業として取り扱われることは少ないと思われる。中学校段階の家庭科でユニバーサルデザインを扱う場合、資料集等でもユニバーサルデザインの実例が紹介されるが、こうした試みの事例を知識として習得すること以上に、生活を見つめる目を育てることが必要であると考え。具体的には、生活を観察し衣食住などの様々な場面で不都合を感じることがないか、問題点を抽出し、生活の改善方法を考える取り組みがユニバーサルデザインの教育には必要ではないかと考える。

本研究では、ユニバーサルデザイン教育に発展させる前段階として、高齢者の衣生活の実例を題材として問題解決に取り組んだが、以下に示す5つの段階を経て、問題解決に取り組むことが、ユニバーサルデザインを考案する授業にも発展できるものであると考える。

- ①高齢者介護施設において高齢者の衣服着脱の課題を観察
- ②高齢者の願い・要望をつかむ
- ③要望をもとに既製服を改良
- ④改良した衣服を高齢者の要望した方に着用し確認
- ⑤高齢者の衣服を考える授業の教材作成

生徒が自分の生活や自分の周囲の生活を見つめ、実生活の中で問題解決に取り組める視点を育てることがユニバーサルデザイン教育につながるものと思われる。

9. おわりに

本研究では、中学校の家庭科において実生活の中の問題に気づき、どのようにして課題解決に取り組むか、さらに中学校段階では自分の生活のみでなく自分の周囲の人々の生活の問題にも気づき、今まで家庭科で習得した知識や技術を活用して他者の立場に立って問題解決に取り組む学習活動を試みた。具体的には、体が不自由になった高齢者の衣生活に着目し、特に既製服の着脱に苦慮している生活実態を捉え、基礎的技術を生かして改良服の考案に取り組む授業実践に取り組んだ。その結果、中学生は教師の提示した標本の影響を受けながらも、高齢者の「願い」を受け留め、各自の生活経験や習得技術をもとに、柔軟な発想で既製服の

改良を提案することができ、またこうした活動に興味を持ち意欲的に取り組む姿勢がみられた。自分の考えをもとに生活を創造する活動に発展できる可能性を見出すことができた。

今回は具体的な高齢者一人一人への対応を考えて授業ではあったが、こうした具体的な問題解決への取り組みは、実感を伴ってユニバーサルデザインを考え出す力にも繋がるものと考えられる。

今後の課題としては、中学生が様々な生活実態と直接向き合える教育の場を作り上げることが必要であろう。こうした試みが、家庭科における生活の創造に繋がるものと考えている。

なお、本研究にご協力頂きました生協わかばの里介護老人保健施設の皆様、また授業実践でご指導、ご協力を賜りました各務原市立桜ヶ丘中学校 横山真智子先生、岐阜大学附属中学校 三品智代先生には、深謝申し上げます。